

# 日々の聖句

2月 公生涯（二）



## 『日々の聖句』の使い方

この冊子は聖書を読み、学び、黙想するための手引で、独立した読み物ではありません。かならず、聖書を開いてその日の箇所を読み、参照箇所も開くようにしてください。

聖書の黙想には、古代から「レクシオ・デヴィナ」という方法が用いられました。それは次の四つの段階を進んで聖書を読む方法です。英語の四つの「R」を意識するとよいでしょう。

一、読む (Read) 心を静めてゆっくりと、何回でも、聖書を読みます。聖書は、神の言葉ですから、神が語っておられる声を聞くようにして読みます。

二、黙想する (Reflect) 黙想は聖書との対話です。聖書になぜこのような言葉が書かれているのだろうか。それが自分にとってどんな意味があるのか、聖書に問

い、聖書に答えてもらおうようにして、その箇所の中心的な部分を思い巡らします。

三、祈る (Respond) この祈りは、黙想によって得られたことに対する応答の祈りです。それは悔い改めや行動に結びつく決心であるかもしれませんが、あるいは、まだ解けなかつた疑問や解決していかないことがらに対するさらなる求めであるかもしれません。それがどんなものであっても、正直に祈ることが大切です。

四、瞑想する (Remain) 祈りに続いて、しばらくの間、神とのまじわりに留まりましょう。「黙想」は「聖書との対話」ですが、「瞑想」は「神との対話」です。神の臨在の中にとどまることによって、御言葉が血肉となり、祈りが生活の中で実現していきます。「瞑想する」ことは神とのまじわりに「留まり」、自分自身を神の手に「委ねる」ことと言い換えることもできます。

あなたがたは行って、自分たちが見たり聞いた  
りしたことをヨハネに伝えなさい。(22)

バプテスマのヨハネは救い主について「その方  
は聖霊と火で、あなたがたにバプテスマを授け  
る。また手に箕を持つて、ご自分の脱穀場を隅々  
まで掃きよめ、麦を集めて倉に納める。そし  
て、殻を消えない火で焼き尽くす」(ルカ3・  
16~17)と語りましたが、イエスは審きよりも赦  
しを説いていました。ヨハネはこの時投獄されて  
いて、自分が語ったことが実現したかどうかを確  
かめることができなかつたので、自分の弟子を遣  
わして、「おいでになるはずの方は、あなたです  
か」とイエスに尋ねさせました。

イエスの答えは、「目の見えない者たちが見、  
足の不自由な者たちが歩き、ツアラアトに冒され  
た者たちがぎよめられ、耳の聞こえない者たちが

聞き、死人たちが生き返り、貧しい者たちに福音  
が伝えられている」(22)というものでした。こ  
うした数々の奇蹟は、救い主が来るときに起こる  
出来事として、すでに預言されていたことでした  
(イザヤ35・5~6、61・1)。イエスは預言の  
成就を示すことによって、ご自分が来るべき救い  
主であると答えたのです。

イエスは言葉とともに力あるみわざによってご  
自分が救い主であることを宣言してきました。イ  
エスのみわざはイエスの言葉を裏打ちし、証しす  
るものでした。それは今日も同じで、イエスは、  
その言葉を信じる者にみわざを体験させ、イエス  
をより一層確信させてくださるのです。

祈り 主よ。あなたが救い主であることを、あな  
たの言葉とともにみわざによっても確信させてく  
ださい。

女から生まれた者の中で、ヨハネよりも偉大な者はだれもいません。しかし、神の国で一番小さい者でさえ、彼より偉大です。(28)

「ヨハネよりも偉大な者はだれもない」というのは、バプテスマのヨハネが預言の成就であるイエスを間近で指し示したからです。

「神の国で一番小さい者」とはイエスの弟子たちのことを指しています。イエスが「あなたがたが見ているものを見る目は幸いです。あなたがたに言います。多くの預言者や王たちは、あなたがたが見ているものを見たいと願ったのに、見られず、あなたがたが聞いていることを聞きたいと願ったのに、聞けませんでした」(ルカ10・23~24)と言われたように、弟子たちは、イエスの言動に、旧約の聖徒たちが長い間待ち望んでいたことの成就を見たのです。

しかし、イエスによる預言の成就を見ようとしなかった人々がいました。それはパリサイ人でした。イエスは彼らのことを、子どもの遊びに例えました。当時の子どもたちの間に、踊って喜ぶグループと泣いて悲しむグループの二組に分かれ、命令の内容によって、どちらかのグループが反応する遊びがありました。「笛吹けど踊らず」

(32) という言葉は、そうした遊びから来ています。パリサイ人は、ヨハネが「悔い改め」を説いても泣いて「悲しむ」ことなく、イエスが「赦し」を宣言しても踊って「喜び」ませんでした。彼らは自らを「知者」だと言いましたが、神の国のことに関しては、小さな子どもたちよりも何も知らない者たちだったのです。

祈り 主よ。あなたの福音を聞いて悔い改める私たちを、神の国の喜びで満たしてください。

この人は多くの罪を赦されています。彼女は多く愛したのですから。(47)

当時大切な客人には、その足を水で洗い、口づけして迎え、頭に香油を塗ってもてなしました。しかし、パリサイ人シモンはそうしませんでした。彼にとってイエスはそれほどに大切な客人ではなかったのです。

シモンがイエスにしなかったことを、その町で「罪深い女」として知られていたひとりの女性が、代わりにしました。イエスが彼女をするがままにしていたので、パリサイ人シモンは心の中で、この女性とイエスを批判しました。イエスは、彼の思いを見抜き、ひとつの譬えを話して、彼女を弁護し、大切な真理を教えました。

その真理とは「多くの罪を赦された者は、罪を赦してくださいった方を多く愛するようになる」と

いうものです。本当は赦されるはずもないような罪を、神が赦してくださいったということを通して、人は神の愛を知ります。ですから。自分は正しいと自負し、赦される必要を感じていない人よりも、自分の罪を知っている人のほうが、悔い改めて罪を赦していただいた時、より神を愛するようになるのです。

これはパウロが「罪の増し加わるところに、恵みも満ちあふれた」(ローマ5・20)と言い、自分を「罪人のかしら」(第一テモテ1・15)と呼び、「主を愛さない者はみな、のろわれよ」(第一コリント16・22)とさえ言つて、熱く主を愛したことに通じるものです。

祈り 主よ。あなたがどんなに大きな愛で私たちを愛しておられるかを、さらに悟らせてください。

彼女たちは、自分の財産をもって彼らに仕えていた。(3)

イエスは十二弟子を連れて町や村を巡りました。弟子たちは職業を捨て、宣教に専念していましたから、イエスと弟子たちを経済的にサポートする必要が起きました。多くの人がイエスの宣教のために支援を惜しみませんでした。ルカの福音書は、「マグダラの女と呼ばれるマリア、ヘロデの執事クーズの妻ヨハンナ、スザンナ」という三人の女性の名をあげています。これらの女性は資産家の妻であったり、未亡人であったりして、財産を自由に使うことができる立場にありました。彼女たちは、男の弟子たちに混じってイエスと共に行動することはできなくても、彼らをサポートすることによって、イエスに「仕えた」のです。

主に仕える道は一つではありません。賜物、環境、立場によって様々な形で主に仕えることができます。イエスは「わたしの弟子だからということで、この小さい者たちの一人に一杯の冷たい水でも飲ませる人は、決して報いを失うことはありません」(マタイ10・42)と言い、ヘブル6・10は「神は正しい方であって、あなたがたの行ないを忘れず、あなたがたがこれまで聖徒たちに仕え、また今も仕えて神の御名のために示したあの愛をお忘れにならないのです」と教えています。働き人を支えることによって、「私たちは真理のために働く同労者」(第三ヨハネ1・8)となるのです。

祈り 主よ。あなたは様々な奉仕の道を示してくださいました。私にできることが何であるかを教えてください。

イエスはこれらのことを話しながら、大声で言われた。「聞く耳のある者は聞きなさい。」(8)

イエスの話を聞くために集まった人々はみな「聞く耳」を持つていました。しかし、イエスの口から出る神の言葉は、音声として「聞く」だけでは意味がありません。「種まきのたとえ」は、神の言葉をどのように聞くかが、どんなに大切にを教えています。

「道端」のような人は神の言葉を聞いてもそれを心にとめません。「岩地」のような人は御言葉を喜んで聞くのですが、それがその人に根付いていないので試練の時にそこから身を引いてしまいます。「茨の地」のような人は「生活における思い煩いや、富や、快樂」で御言葉をふさいでしまい、実がなりかけてもそれが熟さないうちに、それをだめにしてしまいます。しかし、「良い地」

のように神の言葉を受け入れる人は、「良い心でみことばを聞いて、それをしっかりと守り、忍耐して」実を結びます。イエスが人々に求めた「聞く耳」とは、神の言葉を心に留め、それを理解し、受け入れ、それを妨げるものを斥け、神の言葉を忍耐深く実行し続けることを意味します。

聖書の文字だけを目で追い、説教の音声だけを耳にして終わってしまうことがありませんか。神から自分への語りかけとして聖書を読み、説教を聞くことが求められています。神の言葉を聞くためには耳だけでなく、心も、手足も必要です。身も心も、霊もたましいも、それこそ全身全霊で神の言葉に聞くことができるよう祈りましょう。

祈り 主よ。あなたの言葉が私たちの生活に生きて働き、人生に実りをもたらすため、それを良い地のような心で聞くことができますように。

燭台の上に置いて、入って来た人たちに光が見えるようにします。(16)

ここで言われている「明かり」は御言葉によって与えられる真理のことです。詩篇 119・105は「あなたのみことばは私の足のともしび、私の道の光です」と言い、119・130は「みことばの戸が開くと光が差し、浅はかな者に悟りを与えます」と書いています。「聖書はあなたに知恵を与えて、キリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができます」(第二テモテ 3・15)とはまさにその通りで、聖書の他には、私たちを救いと究極の真理に導くものはありません。

御言葉によって真理に導かれた者には、その真理を保ち、それを人々に示す責任が与えられています。「明かりをつけてから、それを器で隠したり、寝台の下に置いたりする人はいません。燭台

の上に置いて、入って来た人たちに光が見えるようにします」というのはそのことを指します。

ルカ 8・16の言葉は、11・33~36でも繰り返されています。そこでも人々に光を輝かせるように言われていますが、11・35には「自分のうちの光が闇にならないように気をつけなさい」と教えられています。自分のうちに真理を保っていなければ、それが私たちから輝き出ることはないからです。「からだの明かりは目です」(ルカ 11・34)

というのは、目が光を取り入れる器官であることを言っているのですが、ここでは靈的な目のことを言っています。神の言葉を聞くことができる靈的な「耳」と、真理を見ることができる靈的な「目」を主に願ひ求めましょう。

祈り 主よ。私たちの目がしっかりと真理を見つめることができますよう、助けてください。



わたしの母、わたしの兄弟たちとは、神のことばを聞いて行かう人たちのことです。(21)

母と兄弟たちがイエスに会いにきましたが、ちようどイエスが大勢の人々を教えている時で、すぐには会えませんでした。それで誰かがイエスにそのことを告げに行きましたが、イエスは、「わたしの母、わたしの兄弟たちとは、神のことばを聞いて行かう人たちのことです」と答えました。また、別の時に群衆のひとりが「あなたを宿した胎、あなたが吸った乳房は幸いです」と言った時も、イエスは「幸いなのは、むしろ神のことばを聞いてそれを守る人たちです」と言いました(ルカ 11・27～28)。イエスは、本当の幸いは、神のことばによつて神と結ばれ、他の人となつながらあると言つたのです。

母マリアは「主によつて語られたことは必ず実

現すると信じた人」(ルカ 1・45)、「神のことばを聞いて行かう人」(同 8・21)、また「神のことばを聞いてそれを守る人」(同 11・28)でした。イエスと母マリアとは血縁以上のもの、神の言葉によつて結ばれていました。イエスとともに始まった共同体は、後に教会となりますが、その時、聖霊を待ち望んで祈つていた百二十人の中に「母マリア、およびイエスの兄弟たち」がいました(使徒 1・14)。イエスは血縁者を御言葉と聖霊による交わりの中へと導きました。私たちも、血縁の中にどっぷり漬つて終わるのでなく、イエスにある交わりに生き、血縁者をそこに導きたいと思ひます。

祈り 主よ。私たちの間に御言葉による交わりを作つてください。それによつて親族をそこに導く力を与えてください。

湖の向こう岸へ渡ろう。(22)

ガリラヤ湖の「向こう岸」、そこはもうユダヤの地ではなく、異邦人、ゲラサ人の地でした。イエスはそこで、悪霊に憑かれ、墓場に住んでいた人のところに行きました。「墓場に住む」というのは、エペソ2・1〜2に「さて、あなたがたは自分の背きと罪の中に死んでいた者であり、かつては、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従つて歩んでいました」とあるように、「生きながらの死」を意味します。

イエスは彼を悪霊から解放し、死から命へと導かれましたが、同じことはキリストを信じる者にも起こりました。「しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆ

えに、背きの中に死んでいた私たちを、キリストとともに生かしてくださいました」(エペソ2・4〜5)とある通りです。

ゲラサの人々はイエスに立ち去るように言い、イエスも再びガリラヤに戻りました。たったひとりのためにでもガリラヤ湖を往復したイエス。ここにイエスの愛を見ることができます。イエスはガリラヤに戻りましたが、悪霊を追い出しても戻った人が、イエスが彼にしたことを町中に言い広めました(39)。イエスによって救われた者には、イエスの愛とあわれみを証しする務めが与えられているのです。ゲラサの人々は、この人の証しを聞いて、イエスを去らせてしまったことを後悔したことでしょう。

祈り 主よ。たったひとりのためにでも行動されるあなたの愛を証しする者としてください。

娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。  
安心して行きなさい。(48)

ヤイロの娘の生き返りと長血の女性の癒やしは、常にひとつの出来事として記されています(マタイ 8・18~26、マルコ 5・21~43)。ヤイロの娘は死にかけていましたが、長血の女性も同じでした。「血はいのち」(申命記 12・23)ですから、出血性の病気は「生きながらの死」だったのです。彼女はそのため青春の12年間を棒にふる、財産も使い果たしました。また「汚れ」を持つものとして神殿にも詣でることができませんでした。病気を癒やしてもらいたいという一心でイエスの衣に触れたのですが、誰にも気付かれないうようにそうしました。それは彼女が自分の病気を恥じ、それを隠しておきたかったからです。

その彼女を、イエスは人々の前に引き出しまし

た。しかし、それは彼女に恥をかかせるためではありませんでした。彼女の病気が癒やされたことをおおやけに宣言することによって、病気のためにそこから疎外されていた家庭と社会に彼女を送り返すためでした。「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。」彼女は、この時、靈的にも社会的にも、神との関係においても人との関係においても「生き返った」のです。イエスは彼女の身体を治癒しただけではなく、彼女を靈的に「生き返え」させたのです。

ヤイロの娘に、また、この女性に命を与えてくださったイエスは今も、信じる者に靈的な命を注いでくださいます。

祈り 主よ。あなたは私たちの身も霊も生かしてください。あなたのお方です。きょうもあなたの命に触れさせてください。

イエスは十二人を呼び集めて、すべての悪霊を制して病気を癒やす力と権威を、彼らにお授けになった。(1)

イエスは十二弟子に「神の国を宣べ伝え」るために「悪霊を制して病気を癒やす力と権威」を授けました。「神の国」とは「神の支配」であり、それは「力と権威」によって証しされなければならぬからです。イエスは昇天の前にも、「わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています。ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子とせよ」(マタイ 28・18〜20)と言って、宣教にはイエスの「権威」が必要であると言っています。また、「聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの

証人となります」(使徒 1・8)とも言って、キリストを証しするための聖霊の「力」を約束しています。使徒パウロも、「私たちの福音は、ことばだけでなく、力と聖霊と強い確信を伴って、あなたがたの間に届いた」(第一テサロニケ 1・5)と言っています。

近年、人間の知恵や力に頼って福音が語られるようになりました。人に受け入れられ、喜ばれる言葉を巧みに語る訓練に力が注がれてきました。しかし、それで人が罪から救われ、キリストに従うようになるものではありません。今日ほど、福音を語る者やキリストを証しする者に天からの権威や力が必要なことはありません。権威ある神の言葉だけが人を救うことができるからです。

祈り 主よ。あなたの権威によって福音を語り伝える私たちとしてください。

そこでイエスは、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げ、それらのゆえに神をほめたたえてそれを裂き、群衆に配るように弟子たちにお与えになった。(16)

「神をほめたたえてそれを裂き、：弟子たちにお与えになった」という言葉は、イエスが最後の晩餐で「パンを取り、感謝の祈りをささげた後これを裂き、弟子たちに与えて：」(ルカ22・19)とある部分を思い起こさせます。最後の晩餐でパンを与える時、イエスはそれを「わたしのからだ」であると言われました。それは聖餐の秘儀を表す言葉で、イエスはパンの形で弟子たちにご自身をお与えになったのです。五千人以上の人々にパンを与えた奇蹟は、聖餐そのものではありませんが、真に人々を満たすものは、麦の粉から作られたものではなく、それを感謝し、裂き、与えた

主ご自身であることを、見逃してはならないと思います。イエスが人々に何かを与えようとする時、イエスは常に、それらを通してご自身を与えようとしておられたのです。イエスから何かを受けとつたとしてもイエスご自身を受け取るのであれば、人は霊の飢え渴きを癒やされ、満たされることはないからです。

そして、イエスはそのことを弟子たちの手を通してされました。今日もイエスは御言葉の糧を人々に届けるのに、イエスを信じイエスに従う人々や御言葉の奉仕者を用いられます。弟子たちがパンを受け取つたのは、それを「群衆に配る」ためでした。キリストを受けた者は、人々にキリストを与える奉仕をしなければならないのです。祈り 主よ。私たちに、御言葉と、あなたご自身を人々に分かち合う務めを果たさせてください。

祈っておられると、その御顔の様子が変わり、その衣は白く光り輝いた。(29)

弟子たちがイエスを「神のキリスト」と告白した後(18~21)、イエスはご自分が多くの苦しみを受け、人々に捨てられ、殺されることを明らかにしました。そして、弟子たちに十字架を負って従う覚悟を問いました(22~27)。これが最初の受難の予告で、二度目は9・44、三度目は18・31~33に書かれています。

この最初の受難予告の後、イエスは変貌の山で栄光の姿を示し、モーセとエリヤと語り合いました。モーセは律法、エリヤは預言者を代表していますから、これは律法と預言者が証してきた救いが、イエスの苦難と復活によって成就することを告げています。ペテロはこう言っています。

「私たちはあなたがたに、私たちの主イエス・キ

リストの力と来臨を知らせましたが、それは、巧みな作り話によったものではありません。私たちは、キリストの威光の目撃者として伝えたのです。この方が父なる神から誉れと栄光を受けられたとき、厳かな栄光の中から、このような御声がありました。『これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。』私たちは聖なる山で主とともにいたので、天からかかったこの御声を自分で聞きました。」(第二ペテロ1・16~18)

イエスは苦難の主であるだけでなく、栄光の主でもあるのです。イエスは苦難の後に続く栄光をあらかじめ見せることによって、苦難を通る弟子たちを励ましてくださったのです。

祈り 主よ。それが苦難の道であっても、あなたに従い、あなたの来臨の時に栄光に与ることができるようになってください。

彼らは、このことばについてイエスに尋ねるのを恐れていた。(45)

ここには、イエスの二度目の受難の予告があります(44)。一度目の予告は弟子たちがイエスを「神の子」と告白した時に語られました(ルカ9・20と22)、二度目は、弟子たちが霊に憑かれた子を癒せなかつた時に語られました。ここでイエスが「ああ、不信仰な曲がった時代だ。いつまで、わたしはあなたがたと一緒にいて、あなたのために我慢しなければならぬのか」(41)と言って嘆いたのは、人々がパンや癒やしのためだけにイエスのもとに押し寄せ、弟子たちさえもイエスの本当の使命を理解しなかつたからでした。

イエスは、人々の心の嘆きや求めに答えようとしてきましたが、人々は、弟子たちを含め、イエスが何をしようとしているのかを知り、自分たち

に何を期待しているのかを分かつたときとしました。弟子たちは、分からないことがあれば直接イエスに尋ねることができたのに、イエスの受難の予告を聞いても、その意味を問うこともしませんでした。彼らの不信仰と、知ろう、分かつた、理解しようとしぬい怠慢が、受難の奥義を隠していたのです。

人はまわりの人々に理解してもらえない時、孤独を感じますが、イエスもまた、弟子たちとともにいながら、孤独を感じていたことでしょう。イエスはご自分が孤独を味わつたからこそ、私たちの孤独を理解してくださるのですが、私たちがイエスのお心を理解せず、その心を痛めることのないようにしたいと思います。

祈り 主よ。みこころを尋ね求めないことによつてあなたを悲しませることがありませんように。

イエスは御顔をエルサレムに向け、毅然として進んで行かれた。(51)

イエスはガリラヤやユダヤでの宣教活動の間、何度かエルサレムに上りましたが、ここでのエルサレムへの旅は最後のものです。イエスはそこに苦難が待っていることを知っていましたが、それから顔をそむけることをせず、「御顔をエルサレムに向け、毅然として」、エルサレムを目指しました。

変貌の山はおそらく「タボル山」であったと思われませんが、そこは領主ピリポが治めていたユダヤの北限でした。変貌の山からガリラヤに戻ったイエスは、そこからエルサレムを目指し、サマリヤの町や村を通ろうとしましたが、サマリヤの人々はそれを許しませんでした。ヤコブとヨハネはそれに憤慨して、「天から火を下して、彼らを

焼き滅ぼしましょうか」と言いましたが、イエスはふたりを叱り、別の村に向かいました。

ヤコブとヨハネのふたりは、イエスがエルサレムに向かっているのが人々を滅びから救うため自らの命を差し出すためであることを理解していなかったもので、そんなことを言ったのです。ふたりは変貌の山でモーセとエリヤが「イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期」について、話していた(ルカ 9・30、31)現場にいたのに、

イエスの使命を理解せず、感情のままに言葉を発しただけでした。それはイエスに従う者の態度であってはいけません。イエスと同じように、与えられた使命に向かつて歩むべきなのです。

祈り 主よ。私たちが、些細なことで腹を立てたり、怒りにとらわれたりして、使命を果たすことにおいて誤ることのないようにしてください。



人の子には枕するところありません。(58)

イエスは進んでイエスに従うと言った人に思い直すようにと言い(57~58)、躊躇する人に決断を促しました(59~62)。人間の意志は弱く、困難に出会ったり、肉親の情愛に引つ張られたりしたりすると、途中で心を翻し、イエスから去っていくことがあり得るのです。イエスに従うことは意志の力によってではなく、召してくださいましたイエスに信頼してはじめてできることが、ここでは教えられています。

ところで、「枕する」というのは直訳すれば「頭を置く」となります。イエスの宣教の生活は、今日はこの家で、明日はあの家で、時には野宿をしてという落ち着かないものでした。しかもイエスは夜遅くまで人々を癒やし、朝早く父なる神との祈りの時を持っていました(ルカ4・40)

42)。「枕する」場所が定まらなかつたばかりか、その時間も十分ではなかつたのです。

ヨハネ19・30はイエスの最期をこう描いています。「イエスは酸いぶどう酒を受けると、『完了した』と言われた。そして、頭を垂れて霊をお渡しになった。」イエスはその最期の時も、「頭を置く」場所を持つことがなかつたのです。イエスは遺体となつてやつと墓に「頭を置く」とことになりましたが、それも丸二日に過ぎませんでした。イエスは復活し、その後四十日して天に昇り、父なる神の右の座に着きました。今もイエスは「枕する」ことなく、ご自分に従う者を守り導いておられます。

祈り 主よ。「枕する」ところを持たなかつたご生涯を思い、あなたに従う決意を新たにさせてください。

収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主に、ご自分の収穫のために働き手を送ってくださいるように祈りなさい。(2)

十二弟子の他に七十二人が選ばれ、病人を癒やし、悪霊を追い出す権威が授けられ、宣教に派遣されました。十二弟子たちだけではイスラエルのすべての人に宣教することができなかったからです。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主に、ご自分の収穫のために働き手を送ってくださいるように祈りなさい」(2)とされている言葉は、全世界七十億の人々に福音を伝えなければならぬ今日、もっと真実なものとなっています。福音を伝えるのは少数の宣教師、牧師、伝道者だけでできることはありません。キリスト者の数が相対的に減少している現代、すべてのキリスト者が、それぞれ自分の置かれた場所で福

音を証しする必要があります。

しかし、実際には、ほとんどのキリスト者が、自分は福音を語るができるほど立派ではないと考え、福音を証しすることをためらっています。しかし、福音は、自分の立派さで証しするものではありません。キリストがふさわしくない者を愛し救ってくださったことが福音なのですから、自分の名が天に書き記されていることを知り、喜ぶことができる人は、誰でも、福音を証しすることができます。私たちはまだ不完全な「子どもたち」(21)です。しかし、その幼子たちに、救いの恵みが明らかにされているのです(23、24)。この幸いを証しするなら、きっと主を見出す人が起こされるでしょう。

祈り 主よ。私たちを「収穫のための働き手」としてください。

あなたも行って、同じようにしなさい。(37)

聖書で「罪人」は「ざいにん」とは読まず、「つみびと」と読みます。「隣人」は「りんじん」でなく「となりびと」と読みます。特別な読み方をするのは、意味の違いを意識するためです。聖書では「罪」は「犯罪」よりも深い意味を持っており、「罪人(つみびと)」は、かならずしも「犯罪人」という意味ではありません。同じように「隣人(となりびと)」も、たんに「隣人」という意味ではありません。

イエスに質問した「律法の専門家」(律法学者)は聖書に通じていたはずなのに、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」という言葉にある「隣人」を「ユダヤの同胞」という意味でしか理解していませんでした。ユダヤ人である彼から見れば「サマリア人」は「隣人」ではなかつ

たのです。それで、イエスは、サマリア人が主人公の譬話を語り、「隣人」とは、自分で決めるものではなく、神が出会わせてくださった「助けを必要とする人」のことであると教えたのです。それは、サマリア人がユダヤ人の隣人になったように、ユダヤ人であるあなたもサマリア人の隣人となりなさいというチャレンジでした。

律法学者は聖書の「隣人」の本当の意味を知らなかつたのに、律法でイエスを試そうとしましたが、イエスに律法の真意を教えられ、イエスの正しさを認めざるを得ませんでした。その彼に、イエスはなおも言いました。「あなたも行って、同じようにしなさい。」

祈り 主よ。無知と偏見によつてあなたの戒めを理解せず、行ってこなかつた私たちを赦し、あなたと隣人を愛する生き方へと導いてください。

しかし、必要なことは一つだけです。マリアはその良いほうを選びました。(42)

ここで「ある村」と言われているのは「ベタニア」のことです。聖書では「ベタニア」というところはふたつあり、ひとつはイエスがヨハネからバプテスマを受けた「ヨルダンの川向こうのベタニア」(ヨハネ1・28)です。もうひとつは、ここで言われている、エルサレムに近い「ベタニア」で、そこは「マリアとその姉妹マルタの村」(ヨハネ11・1)でした。イエスと弟子たちはたびたびそこに宿泊したようです。ベタニアからエルサレムまではわずか「十五スタディオン(約2マイル)」(ヨハネ11・18)しかありませんでしたが、イエスは、この時はまだエルサレムには上りませんでした。ユダヤ各地での宣教の途中にベタニアに立ち寄っただけでした。

マルタはイエスと一行をもてなすために「思い煩って、心を乱して」しまい、姉妹のマリアがイエスの「足もとに座って、主のことに聞き入っている」のを咎めました。そこにはマリアがそうすることを許しているイエスに対する不満もありました。しかし、イエスはマリアから御言葉に聞き入ることを取り上げてはいけなさと、マルタをたしなめました。マルタは、一度や二度でなく、イエスが来るたびに心を込めてもてなしました。イエスはそれを喜び、感謝していましたが、もてなしのために、イエスが教えを語り、マリアがそれを聞くことを妨げるべきではなかったのです。イエスにとつて最高の「もてなし」は、その御言葉に聞くことなのです。

祈り 主よ。常にあなたに聞く心を私たちにお与えください。

求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。(9)

「求めなさい。探しなさい。たたきなさい」は英語で “Ask,” “Seek,” “Knock” で、それぞれの頭文字を合わせると “ASK” となります。イエスは、同じ意味の言葉を重ねることによって、熱心に、真剣に、また、あきらめることなく求めることを、教えたのです。

イエスは「あなたがたの父は、あなたがたが求める前から、あなたがたに必要なものを知っておられる」(マタイ6・8)、「天におられるあなたがたの父は、ご自分に求める者たちに、良いものを与えてくださらないことがあるでしょうか」(同7・11)と教えました。だからといって、私たちが求めなくても、父なる神が自動的に必要

なものや良いものをくださるとは言っていない。神の父としての愛と寛容を知り、それに信頼する者は、心を込めて神に求めなければならないと言われたのです。

神が私たちに必要なものを知っておられ、喜んでそれを与えたいと願っておられるのに、なお、私たちがそれを求めるのを待っておられるのは、それらのものが、努力や偶然によってではなく、神から来ることを、私たちが知って、神に感謝を捧げるようになるためです。神は私たちが神に必要なものを求め、それを祈りの答えとして受け取ることによって、神とのまじわりを保ち、深めていくことを願っておられるのです。

祈り 主よ。何事においてもあなたに祈り求め、あなたがすべての善きものの与え主であることを知ることができまますように。

しかし、わたしが神の指によって悪霊どもを追い出しているのなら、もう神の国はあなたがたのところに来てはいるのです。(20)

人々は悪霊のかしらに「ベルゼルブ」という名をつけていました。これは、旧約時代のエクロンの神、バアル・ゼブブから来た名前と思われ(第二列王記1・2、3、6、16)。パリサイ人や律法学者たちはイエスを「ベルゼルブにつかれている」とか、「悪霊どものかしらによって、悪霊どもを追い出している」と言い(マルコ3・22)、神の御子を「悪霊のかしら」と呼び、聖霊の働きを「悪霊の働き」に置き換えたのです。

イエスは、悪霊の追放が「神の国」の到来を告げていると言いましたが、同時に、悪霊が追い出されるだけでは、人は救われることはできないとも言われました。悪霊に支配されていた者たち

が、その支配から解かれても、聖霊がその人を治めるのでなければ、悪霊が再び戻ってきて「その人の最後の状態は、初めよりも悪くなる」(ルカ11・26)からです。人は、悪霊を追い出しても、聖霊を迎えることがなければ、きよい思いや正しい心を養うことはできません。

パリサイ人たちは、聖霊の働きを目の当たりにしながら、それを否定しました。「神の国」、つまり「聖霊の支配」がそこに来ているのに、それを受け入れませんでした。彼らの宗教は聖霊のない宗教でした。聖霊のない宗教は、「掃除されてきちんと片付いている家」のようであっても、空っぽなもので、人を救い、生かし、悪から守ることはできないのです。

祈り 主よ。聖霊によって私たちのうちに住み、私たちをあらゆる悪しき者から守ってください。

ヨナがニネベの人々のために、しるしとなったように、人の子がこの時代のために、しるしとなるからです。(30)

「しるし」とは、悪霊の追放、病気の癒やしなどの奇蹟をさします。それは本来は、神の大きな愛、あわれみ、また力を指し示し、それらを人に確信させるものですが、人々は、神をあがめるためではなく願望を達成するため、みこころを知るためではなく好奇心を満足させるために「しるし」を求めるようになりました。神ではなく「しるし」だけを求めるようになったのです。

それで、イエスは「この時代は悪い時代です。しるしを求めますが、しるしは与えられません」と言ったのです。しかし、続いて「ただし、ヨナのしるしは別です」と言いました(29)。「ヨナのしるし」というのは、旧約時代の預言者ヨナが

大きな魚に吞まれ、三日間その腹にいましたが、そこから出て、ニネベの人々に悔い改めを宣べ伝えたことを言います。同じように。イエスも三日の間墓に葬られますが、よみがえり、弟子たちを通して罪の赦しの福音を全世界に宣べ伝えるのです。「三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、地の中にいる」(マタイ12・40)というのが、この時代の最大の「しるし」なのです。人は十字架と復活の「しるし」によって神の愛と救いを知ります。イエスは神からの「しるし」そのものとなりました。

祈り 主よ。私たちもパウロとともに言います。

「ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシア人は知恵を追求します。しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えます。」(第一コリント

1・22、23)

だが、わざわいだ、パリサイ人。おまえたちはミント、うん香、あらゆる野菜の十分の一を納めているが、正義と神への愛をおろそかにしている。(42)

イエスは神を求める人々に「幸いです」と言つて祝福しましたが(ルカ6・20~22)、パリサイ人と律法学者に対しては「わざわいだ」(42、43、46、47、52)と言つて批判しました。イエスの批判は悔い改めへの招きでしたが、彼らはイエスの言葉によって自らを省みることをしませんでした。彼らは、すでに、イエスを訴える口実を見つげようと狙っていたましたが、この時から、より一層、「イエスに対して激しい敵意を抱く」ようになりました(ルカ6・7、11・53)。

イエスが彼らを責めたのは、彼らが宗教の規則を忠実に守つてはいても「正義と神への愛」をお

ろそかにしていたからでした。どんな規則も「あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。また、あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」(ルカ10・27)という戒めに要約されます。「正義と神への愛」の「正義」は「人への愛」と言い換えることができます。神の戒めを知り、守っていると主張していたパリサイ人や律法学者が、じつは、最も神の戒めをないがしろにしていたのです。彼らはイエスの指摘に耳をかきませんでした。私たちは謙虚にそれ聞き、真実な悔い改めによって、赦しときよめを求める者でありたいと思います。

祈り 主よ。あなたが罪を示される時、謙虚にそれに聞き、赦しときよめを求めて、あなたに向かうことができますように。



恐れなければならぬ方を、あなたがたに教え  
てあげましょう。(5)

「恐れ」ほど人を束縛し、誤らせるものはありません。ある人は失敗を恐れ、何ひとつ積極的なことをしなくなります。また、ある人は人を恐れ、人との良い関係を築くことができずに引きこもってしまいます。恐れは私たちに与えられている大きな可能性の芽を摘んでしまうのです。キリスト者が反対や迫害を恐れて信仰の面で妥協すると、キリストを証しできなくなり、与えられた使命を果たせなくなります。

それでイエスは弟子たちに、迫害する者は「からだを殺しても、その後は何もできない。彼らを恐れるのではなく、「殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方」、神を恐れるように教えたのです。私たちが抱くさまざまな恐れを

取り去る方法はただひとつ、恐れるべきお方を恐れることです。正しい意味で神を恐れることによつて、人ははじめて自分を束縛している恐れから解放されるのです。

イエスは私たちに「恐れなければならぬ方」を教えてくださいました。また、ご自身がその方に徹頭徹尾服従し、何ものも恐れずにご自分の使命の道を突き進んで行かれました。イエスはその歩みによつて「恐れなければならぬ方」を教え、そのお方を恐れて生きることがどういうことかを示してくださいました。イエスは常に言葉だけでなく、身をもつて弟子たちを教えました。それは私たちの信仰が言葉だけのものにならないで実際の生活に身を結ぶためでした。

祈り 主よ。あなたの歩まれた道を歩ませてください。そこにこそ恐れのない人生があります。

そして、自分のたましいにこう言おう。「わがたましいよ、これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ休め。食べて、飲んで、楽しめ。」(19)

イエスの譬話に登場する「ある金持ち」は言いました。「私の作物」、「私の倉」、「私の穀物や財産」、「自分のたましい」。最初から最後まで「私」、「私」、「私」です。すべてを自分のものだ主張しました。畑が豊作であったのは、神の恵みによるものでした。彼はそれを神に感謝し、豊かに与えられたものを他の人々に分け与えることによって、神への感謝を表すべきでした。ところが彼はそれらすべてを自分の努力で成し遂げたもの、「私のもの」と主張したのです。

「わがたましい」という言葉はここでは「自分の命」という意味で使われます。この金持ち

は、自分が神から生かされている者で、命が神から与えられたものであることを忘れ、あたかも、自分の力で生きているかのようには考えませんでした。それで神は彼に「愚か者、おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか」(20)と言われたのです。

この金持ちは、大きな財産を築いたわけですから、人の目には賢く、有能な人に見えたでしょう。しかし、神の目から見れば「愚かな」人でした。「人のいのちは財産にあるのではない」(15)という道理をわきまえることすらできず、私たちの必要を満たしてくださる神(30、31)への信頼を持たなかつたからです。

祈り 主よ。あなたへの信頼によって私たちを貪欲と思ひ煩いから救ってください。

あなたがたも用心していなさい。人の子は、思  
いがけない時に来るのです。(40)

「人の子」には二つの意味があります。ひとつは創造者である主なる神に対して被造物である人間を指す場合です。「人とは何ものなのでしょう。あなたが心に留められるとは。人の子とはいったい何ものなのでしょう。あなたが顧みてくださるとは」(詩篇8・4)など、それは多くの箇所が使われています。

もうひとつはダニエル7・13と14で、そこにはこうあります。「人の子のような方が天の雲とともに来られた。その方は『年を経た方』のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と榮譽と国が与えられ、諸民族、諸国民、諸言語の者たちはみな、この方に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国

は滅びることがない。」この場合「人の子」はメシアを指します。イエスは自分がこの「人の子」であり、「人の子が天の雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来る」(マタイ24・30)。「あなたがたは今から後に、人の子が力ある方の右の座に着き、そして天の雲とともに来るのを見ることになります」(マタイ26・64)と宣言しています。

イエスは二度目には「王」として来られます。この栄光の王を迎えるにあたって、私たちには忠実なしもべであることが求められているのです。イエスは最初に「しもべ」となって世に來られたことよって、私たちに忠実なしもべの姿を教えてくださいましたのです(マルコ10・45)。

祈り 主よ。しもべとなられたあなたに倣うことよによって王であるあなたの再臨を迎えることができますように。

あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらすために来たと思つていますか。そうではありません。あなたがたに言いますが、むしろ分裂で  
す。(51)

救い主は、世界に平和をもたらす「平和の君」(イザヤ9・6)であるのに、イエスは「わたし  
が来たのは平和ではなく分裂をもたらすためだ」と言われました。聖書は「平和の絆で結ばれて、  
御霊による一致を熱心に保ちなさい」(エペソ  
4・3)と教えているのに、なぜ、イエスは、こ  
のように言われたのでしょうか。

再臨の前に迫害が起こることが預言されていますが、迫害の常套手段は、信仰を保っている者  
たとえば家族であっても、密告させ、「肉親の情」  
を使つて信仰を棄てさせることです。権力者は家  
族のつながりを利用してキリストへの忠誠を誓う

人々を苦しめてきました。イエスは、そのようにして家族の中にやむをえず起こる信仰ゆえの「分  
裂」や「対立」のことを言われたのです。

父と子、母と娘、姑と嫁とが対立するというの  
は、信仰を守つてキリストを証しするのか、信仰  
を棄てて妥協するのかわで対立することを指してい  
ます。そのような時には家族と対立しても、信仰  
を選ぶことが良い選択ですが、もつと良いこと  
は、家族が一致して信仰に立ち、迫害する者の策  
略に乗らないことです。みせかけの平和に惑わさ  
れず、真の信仰の一致を求めるとき、家族もまた  
救われることを、信仰者たちは、いつの時代でも  
体験してきました。

祈り 主よ。信仰において妥協し、自分ばかりで  
なく、家族の救いをも妨げてしまうことのないよ  
う、導き助けてください。

あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。(13・5)

エルサレムへの途上にあるイエスのもとに、故郷のガリラヤの人々がエルサレムで総督ピラトによつて殺され、その血が神殿のさきげものに混ぜられたというニュースが届きました(13・1)。それを聞いた人々は「きつと彼らは特別に罪深かったのでそんな目に遇つたのだ」と考えました。それでイエスは、このガリラヤの人たちは他の人たちよりも罪深かつたわけではない。人はすべて罪びとであり、神の正義の審判を受けて当然なのだ。だから、誰であつても悔い改めなければならぬと、人々に教えました(13・2~5)。

ガリラヤの人である「ナザレのイエス」はこの後、エルサレムに行きます。そして、そこで総督ピラトに引き渡され、ピラトはイエスを十字架に

つけます。今、伝えられた、ピラトによるガリラヤの人たちの虐殺事件は、やがてイエスの身に起こることの前触れでした。

イエスは反対者たちの策略や政治的な駆け引きなどによつて十字架にかかることになりましたが、実際は、罪のないイエスが神の裁きのもとにある人間の代わりにその刑罰を受け、悔い改めてイエスを信じる者を罪の刑罰から解放するためのものでした。イエスは「あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます」と警告しましたが、それは言い換えれば、「悔い改めるなら救われる」ということです。イエスは私たちが悔い改めて救われるための道を切り開くためエルサレムに向かわれたのです。

祈り 主よ。あなたが開いてくださった救いの道を、悔い改めと信仰によつて歩ませてください。

「ご主人様、どうか、今年もう一年そのままにしておいてください。」(9)

「ぶどう園」も「いちじく」もイスラエルを象徴するもので、ルカ13・6と9の譬話の「ぶどう園のいちじく」がイスラエルを指していることは誰にも分かりました。ぶどう園の主人は父なる神で、「ぶどう園の番人」はイエスです。

主人はいちじくに三年も実がならないので、切り倒してしまえと命じましたが、ぶどう園の番人は、「今年もう一年そのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥料をやってみます」と猶予を求めました。「三年」は旧約の時代を表すのでしよう。イスラエルは旧約時代を通して、神のために何の良い実も結びませんでした。「もう一年」はイエスの宣教の期間のことでしょう。イエスはイスラエルが実を結ぶものとなるよう、ど

れだけ熱心に御言葉を語り、とりなし、祈ったことでしょうか。しかし、人々はイエスを斥けたので、ついに、いちじくであるイスラエルは切り倒されました(9)。

それ以来、福音は異邦人に伝えられ、異邦人への恵みの期間が二千年もの長い間続きました。しかし、それもまた終わりを告げるのです。しかもいつ終わるかは誰にも分かりません。「それも、神のいつくしみ深さがあなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かないつくしみと忍耐と寛容を軽んじているのですか」(ローマ2・4)とあるように、私たちも、神の招きに耳をふさいだり、逆らい続けたりすることのないようにしたいと思います。

祈り 主よ。私たちがあなたの忍耐と寛容を無駄にすることのないようにしてください。

狭い門から入るように努めなさい。あなたがたに言いますが、多くの人が、入ろうとしても入れなくなるからです。(24)

イエスがエルサレムに近づくとつれてイエスの教えは終末的なものになっていきます。イスラエルへの宣教の期間がもうすぐ終わり、神の国への門がイスラエルに対しては閉じられ、異邦人に対して開かれる時が来ようとしていたからです。イエスは、門が開かれている間に、神の国を受け入れるよう、人々に勧めたのです。

イエスが言われた「狭い門」は本当は、すべての人に大きく開けられた恵みの門なのです。けれども、神殿の儀式に慣れ親しみ、律法を守ることを教え込まれてきたユダヤの人々にとつて、それは「狭い門」に見えました。彼らは救いの門を自分たちの考えで狭めていたのです。

それは、生まれた時から神社の氏子や寺の檀家の一員として過ごしてきた多くの日本人にとつても同じでしょう。自分たちには神道や仏教という宗教がすでにあるのだから、「キリスト教」という宗教は要らないと考え、すべての人の造り主であり、父である神と、その御子イエスへの信仰を「狭い門」にしてしまっているのです。しかし、目を開いて見るなら、この信仰の門こそ、ただ一つの救いの門であることが分かるはずです。異邦人のために開かれた救いの門も、やがて、「入ろうとしても入れなくなる」時がやってきます。その前に、救いの道を歩むため、信仰の門に入っているようにしたいと思います。

祈り 主よ。すべての事柄には期限があることを覚えさせてください。きょうという日に、あなたの恵みの招きに答える私たちとしてください。



**Penguin Club**

[www.penguinclub.net](http://www.penguinclub.net)